

〈書評〉

渋谷治美著

『カントと自己実現——人間讃歌とそのゆくえ』

(花伝社、2021年)

永守 伸年

本書は著者の半世紀に及ぶ研究の集大成として、多領域にわたるカントの著作を横断し、カント哲学の全体像を明らかにしようとする大著である(本書は第35回和辻哲郎学術部門を受賞した)。その際立った特徴はテキスト・クリティークの緻密さと、思想史研究の射程の広さがみごとに同居するところにある。たとえば、原典の人称代名詞や、関係代名詞をどのように解釈するべきか——これはカントの文体と格闘する研究者にはおなじみの悩みだが、この(一見すると)些細な翻訳の問題が、本書では「心身問題」や「ニヒリズム」といった哲学史上の古典的問題にそくして読み解かれ、やがて細部にひそむカントの思想がデカルトやスピノザとの対決において描き出される。

このようなスリルを与えてくれる本書は三部から成り立つ。第一部は『純粹理性批判』を中心とする「認識存在論」、第二部は実践哲学に関する「実践価値論」に取り組み、第三部はカントの政治的発言の「真意を読む」ことが目指される。このうち、第一部と第二部の最後にはそれぞれの部門の研究成果を集約する「到達点」として「研究ノート」が付され、これが著者の原典講読の授業に出席しているかのような臨場感のある、ユニークなドキュメントになっている。「研究ノート」が論文の体裁にこだわらず、いくつかの問いに開かれたまま終わるのは、カントの思考をその複雑な発展過程のままに伝えようとするためだろう。以下、これらのノートを中心として本書の内容を紹介する。

まず第一部では、『純粹理性批判』がデカルトに由来する「心身問題」の「カント的止揚」の構図にしたがって論じられる。「心身問題」が「考える私」と「直観する私」の二つの私は異なりつつしかもいかにして同じ主観として一つであるか」という二元論の課題として捉えなおされ、その克服の可能性が「演繹論」、「観念論論駁」、「誤謬推理論」の記述にそくして慎重に検討されるのである。「研究ノート」では、このような二元論の課題が「判断の統一と直観の統一とはともに純粹悟性の働き」であるという、いわゆる「形而上学的演繹」のテーゼに認められたのち、それが「第二版演繹論」における内的触発の理論において明確化されたという解釈が提示される。すなわち、「物自体の外感への触発」と、「悟性の内感への触発」は「同じ仕方です」それぞれの現象を「秩序づける」という解釈である。この解釈によって(1)「心身問題」がカントの触発の理論によって独自に解決されているという展望とともに、(2)この展望は演繹論の書き換えを経て切り拓かれ、深化を遂げているという発展的な『純粹理性批判』の読み方が示されることになる。

注意したいのは、この解釈では「心身問題」がもっぱら「秩序づける」心的作用によって解決されていることである。この点については著者自身も自覚しており、「研究ノート」の末尾では「〈心身問題〉は「身」ではなく「心」(悟性)の方が主体となって解決するのだ、と一方的に断定されただけではないか」という懸念が表明される(172)。著者は「カント自身がこのことに気づいていた可能性もあるだろう」とも述べているが、むしろその可能性を前提とした上で、「それではカントにとって「身」とは何を意味する(べき)だろうか」と問いを重ねる余地もあるのではないだろうか(そし

てこの問いに取り組むための一つの展望は、「後期カント」の心身問題をめぐる本書の第二章の記述に与えられているようにも思われた)。

続く第二部においても、問われるのは「演繹」である。ただし、カントの実践哲学においては演繹の成否以前に、「道徳法則」と「自由」のどちらが先行して、他方を演繹しようとするのかという演繹の構造そのものが問われなければならない。この構造を明らかにするために、『道徳形而上学の基礎づけ』と『実践理性批判』という二つの著作を舞台としてカントの「実践価値論」の思想遍歴がたどられる。最終的には、演繹が「挫折」に至る過程が「研究ノート」において跡づけられることになる。そこでは演繹の前提とされるはずのものが、実はそれ自体として理想的性格をそなえるという「循環論法」に陥っていることが四つのタイプの演繹にしたがって追究されており、その執拗な読み筋はカントの実践哲学の研究史においてほとんど前例がない。結果として、道徳法則の理想的性格にはその裏側に論証の挫折、そしてニヒリズムへの接近を予感させ、著者はそこにカントの実践哲学の限界とともに固有の意義を認めることになる。

他方、「実践価値論」の帰趨を見きわめるためには上記の二つの著作だけでなく、『判断力批判』の展開も看過することはできない。もちろん著者もカントの晩年の著作に十分な注意を払っており、たとえば「最高善」に関しては、『判断力批判』において「この現世つまりこの地球上の歴史過程を考えていた点」を強調している(333)。それでも、スピノザとの対決あるいは著者の述べる「朗らかなニヒリズム」を明らかにするためには『判断力批判』の価値論が決定的に重要になるはずであり、この点については著者による本格的な検討を待ちたい。

第三部では、『人間学』や歴史をめぐるとして、「カントの意図の多重構造」が解き明かされる。共和制の主張、革命に対する態度、理性宗教の擁護といった多様なトピックを含む第三部の論述だが、カントの「話術」やレトリックに光が当てられているところに本書の特徴がある。たとえば、一読すると雑多な話題から成り立つ『人間学』の読解にあたっては、細やかな文体の綾、その言葉づかいに注目することによって著作としての体系性が明らかにされる。たとえば「Spiel」という言葉の「ふざけ」、「遊び」、「弄び」といった意味の重なりこめられたユーモアを解きほぐしながら、そこに偶然性をめぐるカントの洞察を導き出そうとする著者の手つきは、哲学と文体の関係についてあらためて再考を促されるものだった。そして偶然性の思想は、第一部、第二部の議論とは異なる角度からニヒリズムの問題に迫ることだろう(「偶然とは、それがそうでなければならない理由に欠けるところがある、そうであらねばならない根拠が結局はない、ということの意味するからである」(359))。

こうして「認識存在論」、「実践価値論」、さらには「人間学」に及ぶ検討によって、カント哲学の輪郭がデカルトやスピノザとの対比において鮮やかに際立たされつつ、その内実がニーチェやマルクスの「近代ニヒリズムの系譜」において大胆に捉えなおされる。本著ではこの展望が十分な説得力を持って示される一方、カントの思想がニヒリズムを突破する、その可能性については「一元論に立脚した自由論の試みになるはずである」ことが理論的課題として予告されるまま閉じられている(389)。評者としてはこれをみずからの課題として受けとめつつ、(「著者の五十年に亘るカント研究の集大成」と銘打たれた本著に対しては過大な要求ともなることを承知の上で、)あえて著者の今後の研究の展開を待ち望みたい。